

あり、日暮て家にかへるには、彼のきんに紐をからげて結びあげ、肩に掛けて戻ると、むかしの二代目なれと申たる有り、一とせ紅毛人江戸へ拜禮に来れる時、これを見て不便の事なり、水を取て愈しあたへんと、通事を以て申ければ、彼の乞食答へて、其の志の程は忝けれど、我は此陰囊の故を以て、今日錢を得て樂に暮す也、今此陰囊人並になりては、却て飢渴に及べければ、此陰囊こそ我命の親なりとて、療治を受けずとかや、をかしき話也、

大陰莖

〔瘍科秘録<sup>四</sup>〕水癩 大陰莖 腸癩

陰莖太ク腫レテ瓜ノ如クニナリ、包莖ノ者多痛痒モセズ、但癩癩トシテ堅硬頑痺ルモノヲ春林軒ニテ大陰莖ト名ク、是モ水癩ト同病ナリ、先年大陰莖ノ長サ尺許リノ者ノ觀物場ニ出シコトアリ、

足病

〔日本書紀<sup>二十四</sup>皇極〕三年正月乙亥朔、以中臣鎌子連、拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三島、于時輕皇子患脚不朝、中臣鎌子連曾善於輕皇子、故詣彼宮而將待宿、

〔萬葉集<sup>二</sup>〕同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首  
 吾聞之耳爾好似葦若未乃足痛吾勢勤多扶倍思、

右依中郎足疾贈此歌問訊也

〔日本後紀<sup>二十二</sup>嵯峨〕弘仁三年九月丙子、况復時屬昇平、世返淳朴、感恩勵力、竊斯懸車、頃來渴病彌積、兼暗眼精兩脚強疼、行步失便、內自省量、既知不可、在於物議、更亦何疑、若猶事蠢愚、都迷止足、恐鼎不堪、任、遂致覆餗、伏願辭罷官職、養疾私第、遙同葵藿、朝夕傾心、

〔空穗物語<sup>菊</sup>の宴〕御かへりなし、大將のぬしいたくなげきて、はせにもうで給て、こほす事をかたうおほいなるぐはんをたて給て、七日ばかりこもり給て、びごとに玄ゆきやうしつ、おもふ事なし給へらば、こがねのだうたてん、こむじきの御かたあらはしたてまつらむ、月に一どさうの